家族配置図法：
家族を表出することが苦手な子どものための家族画構築をめざして

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-09-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 宇治, 和子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4571

家族配置図法

－家族を表出することが苦手な子どものための家族画構築をめざして－

宇治　和子
臨床心理学専攻修了生・奈良女子大学大学院博士研究員

要約
家族画は，言語に未熟さを抱える子どもたちと関わる心理面接場面において，彼らの家族内の葛藤や問題点，援助のポイントなどを明らかにするために役立つアセスメントツールである。しかし実際の臨床現場では，これら従来の家族画を描くことに不安を感じ拒否する子どもたち（家族表出困難児）が存在する。そのような子どもたちに侵襲性の少ない方法で家族画を描いてもらうために，本研究では様々な工夫を行った家族配置図という新しい家族画法を考案した。そして青年期の男女 111 人による健常群資料を分析し，家族画としての有効性を検討した。その結果，課題に対する侵襲性は抑えられつつ，描画内で起こる家族に関する投映の軌跡をたどるという分析視点や，描画の印象を 7 タイプに分けて捉えることで被検者の家族という感覚に接近できることなどが明らかとなった。更に有益な解釈枠組みを導き出すために，今後は臨床群の資料も収集して分析する必要があると考えられた。

キーワード：家族配置図・アセスメント・侵襲性・家族表出困難児

Ⅰ　問題と目的

家族画には，通常の家族画法に加え，動的家族画法（KFD）や円枠家族描画法（F－C－C－D）といった方法がある。これらは言語に未熟さを抱える子どもたちと関わる心理面接場面において，彼らの家族内の葛藤や問題点，援助のポイントなどを明らかにするために役立つアセスメントツールとなる。しかし実際の臨床現場では，これら従来の家族画を描くことに不安を感じ拒否する子どもたち（以下，家族表出困難児），というのも存在する。そのような子どもたちに侵襲性の少ない方法で家族画を描いてもらうには，これまでとは異なるアプローチを考えなければならない。そこで本研究は，家族配置図という新しい家族画法を考案し，できるだけ多くの健常群の資料を分析することによって，この方法が臨床現場で活用できるものであるかどうかを検討することにした。

特に家族表出困難児として思い当たるのは，DV 避難シェルター（以下，シェルター）に被害者と一緒に逃げてくる子どもたち（以下，DV 同伴児）である。筆者は DV 被害者支援の現場に心理士として関わっていたのだが，面接場面で彼らに家族画を描いてもらおうとしては「できない」と拒否される体験を何度も繰り返した。まれに描いてもらうことに成功しても，途中でやめてしまったりスティック（棒状）の人物像だったりマンガやゲームのキャラクターだったりして，テスト状況に対する防衛や抵抗がある（遠藤，1989）ということをかろうじて理解するだけに留まっていた。だが家族画を断念して HTPP（高橋，1974）テストなどに変更してみると，不思議に課題を拒否する子どもはいなかった。そこからこのような子どもたちが苦手としていたのは，描画そのものではなく，家族を描くことだったのではないかと推測した。

そもそも彼らに家族画を描いてもらおうとした

目的は，言葉では表現することが難しい家庭内の状況（両親の一方が一方を不当に攻撃するという暴力やそれによって生じた家族内の軋轢，自分の立ち位置など）を，絵によってなら表出することができ，かつ受け止められるのではないかと期待したからである。1 枚の絵に家族メンバーが登場すれば，近藤（2009）が S−HTPP という方法の中で描画に反映された対象関係の特徴を表情・視線・人物像の表現様式・身体接触の 4 項目で分析したように，家族の関係性を総合的にアセスメントすることができる。また塩飽（2015）が行った被災地の子どもたちの報告のように，描画という遊びを通して子どもたちの心的外傷を癒す効果が得られれば，DV 同伴児たちの支援アプローチとして技法を活かすこともできる。家族画は，DV 被害者支援の現場ニーズに適した描画法と考えられた。

心理テスト課題そのものが被検者にネガティヴな感情を引き起こす，という問題は以前から知られており，侵襲性として理解されてきた。侵襲性については研究者によって様々な捉え方があるが，本論文では奥野ら（2004）が述べる，“課題が被検者に与える否定的なインパクトのこと”と定義する。これまでの臨床心理学研究において，描画法は投映法の一種とはいえロールシャッハテストや TAT などと比べると侵襲性は低いと判断されてきたために，その問題について積極的に語られることは少なかった。まして子どもにとって絵を描くことは普段の遊びの範疇であるから，高橋（1989）が述べるように，セラピストがラポールをとって子どもたちのテストへの警戒心や緊張を解き，協力して描画するような雰囲気を作り，思ったように自由に描けるように心がけることの方が重要，と考えられてきた。したがって描画法の中で家族画だけが，ことさら子どもにとって侵襲性の高い心理テスト課題になっていると捉えることは間違いであろう。多くの臨床群の子どもたちにとっては，否定的なインパクトがあるとしてもそれは問題にならないような程度で済んでいるからだ。ではなぜこの家族画が，DV 同伴児たちにとっては拒否したくなるような課題になってしまっていたのだろうか。その理由を探るためには，DV 問題を抱える家庭特有の要因を考慮しつつ彼らの気持ちを検討しなければならない。

まず考えられるのは，DV 同伴児たちが家族を描いて欲しいという教示を聞いた時に，絵のモデルとして家族のどの場面をイメージすればいいのかわからなかった可能性である。DV 問題を抱えていても，四六時中暴力を振るっている加害者はいないので，暴力が起こり荒れている家庭状況もあれば暴力がなく穏やかという状況もある。その差が極端であればあるほど，子どもからすればどれが自分たち家族の姿なのかわからなくなることもあるだろう。家族画の教示の自由度が侵襲性に関与しているならば，場面をあらかじめ設定することも大切と考える。次に，家族の力動をどのように描くかということに DV 同伴児たちが葛藤している可能性がある。DV を目撃することは，自身が直接攻撃を受ける虐待とは質が異なる。子どもにとって大切な人たちが傷つけ傷つけられる姿を自身ではどうにもできず，ただ見ているだけなのである。その状況の繰り返しが子どもたちのダメージの根本ではあるが，一方でそれを客観的に捉えた時に子どもとして両親の行為のどちらに肩入れするかという問題も立ち上がってくるだろう。加害親が悪く被害親は悪くないという構図は被害親やセラピストを含むシェルター側の状況理解で，子どもが本当にそう思っているかどうかはわからない。彼らが周囲の大人たちの思惑を感じ取ってしまうと，家族画を描くことに抵抗を感じるかもしれない。家族の現状を自然に表出できるようにするための仕掛けが，課題内に求められる。そしてシェルターに逃げてきているという現在の状況を，DV 同伴児たちがどのように受け止めたらいいのかわからない，という可能性について検討する。これは宇治（2013）が述べた，DV 被害を前提としない家族体制の構築という目標に対する過渡期特有の，被害親と子どもたちの間で起こる，環境が激変することへの不安や戸惑い，両者間の葛藤とも関連している。子どもの立場では与

えられる情報も限られていることから，これから家族がどうなるのだろうと心配していても不思議はない。家族の枠組みそのものが変化するかもしれない状況で，あえて以前の家族関係を描くことは難しい。家族の枠組みの変化をあまり意識せずありのままの状態を表出することができる方法があるとよい。

以上をふまえ本研究では，DV 同伴児のような家族表出困難児たちのために，侵襲性の少ない新しい家族画法の検討を行う。そのための工夫として，まず描いてもらう場面を基本的生活体験の一つである食事風景に設定する。次に家族の力動を周囲の意見に左右されず表出できることを保障するため，図式的投影法（水島・草田，2006）を参考に，人物の表し方を記号表記にする。記号化すると人物の向いている方向を示す手がかりが失われてしまうが，今回は侵襲性を下げるという目的を重視し，あえて方向を示す作業は追加しない。代わりに円卓を前もって提示することで大まかな方向性が把握できるように努める。最後に変化を含んだ家族の枠組みを自然に表現できる方法については，家族イメージ法（亀口，2009）の分析を参考にすると，配置の仕方に着目するとよいと考えられた。そこで円卓に記号で人物を描いてもらいその配置を主な分析視点にした家族画を，家族配置図法として提案することにする。そしてこの描画法が侵襲性に対してどの程度有効なのか，またどのような家族分析が可能であるのか，健常群の資料により考察する。

Ⅱ　方法

1. 研究協力者

大学生 111 人（男性 30 人（平均 20.7 歳，*SD*＝1.94，レンジ 19〜26 歳），女性 81 人（平均 19.7 歳，*SD*＝1.83，レンジ 18〜25 歳））に，任意で研究協力してもらった。大学生を選んだ理由は，青年期で精神的に安定している人が多く，定位家族の影響を強く受けており，生殖家族をもつにはまだ早く，進学による一人暮らしという疑似自立生活スタイルを取っている可能性があることに着目したからである。

2. 材料

A4 用紙 2 枚 1 組のワークシートを作成した（資料 1）。

ワーク 1 は，上野（1994）のファミリー・アイデンティティ調査を参考に，①年齢とどのような生活をしているか，②ジェノグラムの記入，③「自分の家族」と思う範囲に線を引いて囲む，④その根拠について述べる，という指示を記した。ワーク 1 を用意したのは，今の生活状況（誰とどんな風に暮らしているか）や家族メンバー（兄弟は何人いるかなど），家族についての捉え方など，家族配置図の内容を客観的に補てんする情報を得るためである。

ワーク 2 では，上部スペースに家族配置図用の縦 66mm，横 72mm の楕円形を前もって描き，①食卓に家族で座っているところを想像する，②食卓についている人物を簡単な印で配置，③誰がどこに座っているかを書き込む，④その配置図について自己分析をする，という指示を記した。食卓に見立てる形を楕円形にしたのは，四角では実際の食卓のイメージだけを喚起させてしまう可能性が高く，また完全な円形にするとシンメトリーな配置が強制されてしまうのではないか，と判断したからである。

3. 手続き

＜ワーク 1・2 の実施＞

ワークシートを配り，それに沿って口頭でも多少の内容説明を行った。そして書きたくない場合はとばしても良いこと，書いてもらった内容は研究として分析させてもらうこと，などを伝えた。集団で実施した場合と，個別に実施した場合とがあった。

質問は随時受け付けたが，手続きがわからないという人はなかった。ワーク 1 の①では，「生活を共にするメンバーを具体的に書いてほしい」と注意を促した。ワーク 2 の④の自己分析について，どのようなことを書けばいいかという質問が多かったので，「どうしてこんな配置にしたのかを説明してほしい。あるいは自分の配置を客観的に見て

どう思うかを自由に述べてほしい」と依頼した。

特に時間制限は設けなかったが，早ければ 3 分，遅くても 10 分程度で終了した。終了後，速やかにワークシートを回収した（持ち帰ってしまった人が数人おり，後から回収した）。

＜データの分析について＞

ワーク 1・2 の内容に基づき，以下に示す分析 1 と分析 2 を順に行った。

（分析 1）1. 研究協力者群の家族形態の整理を行う
2. 家族メンバーと家族配置図内容とのズレに着目し，投映された家族事情の検討を行う

（分析 2）1. 食卓を 8 領域に分割し一定基準を設けて，描かれた家族配置図から“私”の位置を特定，その分布を整理する
2.“私”の対極にどんな人物が配置されているかを特定し，その特徴を調べる
3. 描画データを縮小して描き写し，KJ 法（川喜田・牧島，1970）に準じた方法によって印象評定し分類する

Ⅲ　結果と考察

分析手続きに従い，分析 1 では研究協力者が記述した内容を中心として，家族形態の整理と投映された家族事情の検討を行った。

（分析 1）1. 家族形態の整理

本データを吟味した結果，一人暮らしが 22 人，寮・下宿生活が 6 人，核家族の子どもの立場で夫婦が 55 人，母子が 10 人，父子が 1 人，拡大家族の子どもの立場で夫婦が 11 人，母子が 3 人，父子が 1 人，複合家族の子どもの立場で夫婦が 1 人，父子が 1 人と特定した。この様に表現するのは，ワーク 1 の①において「実家暮らし」「家族と暮らしている」など曖昧な記述をする人が多かったためである。そういう場合は他の情報から総合的に判断した。家族形態の整理結果を，表 1 において記す。

以上の整理により，研究協力者群は，核家族の形態で生活する人が 59.5%，親元を離れ疑似自立生活スタイルを取る人が 25.2%，拡大家族の形態を取る人が 13.5%，複合家族の形態を取る人が 1.8%になるとわかった。なお特殊な事情として，ステップファミリーの人が 3 人，父親あるいは母親が単身赴任中である人が 5 人，離婚はしていないが両親が別居中の人が 2 人含まれていた。ステップファミリーは継父継母関係ではあるが基本となるそれぞれの家族形態へ分類し，単身赴任は現在不在の親を抜いて母子，父子の形態として理解した。別居中については，研究協力者の記述を見ると，現実にはその場にいない親であるにも関わらず「戸籍上は」などの言葉でとりあえずいるものとして捉えられていることから，両親がそろう形態に準じることにした。

2. 投映された家族事情の検討

次に家族配置図内のメンバーについて，「単身赴任で今，父はいないけど，いつもの座り方」「近くに住んでいて仲良し」「今兄は自立して家を出ているけど，自分の家族に兄は重要」など，研究協力者が注釈をつける人物が出現することに着目した。これらの人物は，現実の生活には存在しないが描画データ内には追加で登場する，という特徴がある。そこで彼らが申告した生活を共にするメンバーが，そのまま家族配置図の内容に正確に反映されているかどうかを確認することにした。加えて記述情報から，家を出ている兄弟姉妹や単身赴任中の親がいる人だけを抽出し，現実には不在の人物を家族配置図に追加で登場させなかった例はないか確認した。その結果，生活を共にするメンバーがそのまま正確に反映されていた人（現状反映）が 68 人，そうでない人（家族事情の投映）が 40 人（追加 39 人・削除 1 人），家族配置図を描かなかった人が 3 人（Reject 理由は不明），家を出ている兄弟姉妹や単身赴任中の親を追加で登場させなかった例は 2 人（不在者ぬき）という結果になった。ここから家族配置図は，現実に基づいて描かれるものではあるが，必ずしも事実の申告だけに留まらず描画者の家族事情による投映が含まれる場合が多分にあることが示された。

更に生活を共にするメンバーが反映されなかった40人に注目し，内容を詳しく検討した。その結果ここに含まれるのは，12人の核家族，拡大家族形態の人と，残り28人は一人暮らしや寮・下宿生活の人であった。前者12人の場合の家族メンバーが追加された11ケースは，単身赴任中の父親や自立した兄，結婚した姉，近所に住む祖父母などがあがっていた。またこれらの人物は，今の自分の生活に合流する（戻ってきたり遊びに来たりする）イメージで描かれていた。なお削除された1ケースは祖父母だったので，もしかすると2世帯住宅に住み食卓が別である可能性が考えられた。一方後者28人の場合は，描かれるのはすべて自身を含めた実家の家族メンバーが基本になっていた。それは今の自分の生活に実家メンバーが合流してくる（遊びに来る）のではなく，「帰ったらいる人たち」「家ではこんな感じ」と，自身が家族メンバーに合流する（戻っていく）イメージで描かれていた。なおこの投映された家族事情が，実際の帰省時の状況だけに依拠しているかというとそうでもないことがわかった。28人中10ケースでは，亡くなった母親や今家を出ている兄弟，実家とは別世帯の祖父母などが投映された食卓に合流してくる様子が見られたからである。以上の投映された家族事情の検討結果を，表1に合わせて記す。

次に分析2では，家族配置図の質的検討を中心として，“私”の位置の特定とその分布，“私”の対極にいる人物の整理，描画データの印象評定を行った。

（分析2）1.“私”の位置の特定とその分布

研究協力者の中には，生活を共にするメンバーの記述に自分自身を足し忘れたり書き忘れたりする人がいたが，家族配置図内に“私”を描きそびれる人は誰もいなかった。ここから家族配置図には，家族内での自分自身の居場所を感覚的に表現し基底する要素が含まれていると推測した。そう

表1. 家族形態と投映された家族事情

n=111

家族形態	n/%		人数	現状反映	家族事情の投映（追加）	家族事情の投映（削除）
疑似自立	28/25.2	一人暮らし	22	0	実家 14 実家＋α 8	
		寮・下宿	6	0	実家 4 実家＋α 2	
核家族	66/59.5	夫婦	55	49 *Rej 1	現状＋α 5	
		母子	10	7	現状＋α 3	
		父子	1	1	0	
拡大家族	15/13.5	夫婦	11	（不在者ぬき 1）6 *Rej 2	現状＋α 2	現状－祖父母 1
		母子	3	（不在者ぬき 1）2	現状＋α 1	
		父子	1	1	0	
複合家族	2/1.8	夫婦	1	1	0	
		母子	0	0	0	
		父子	1	1	0	
			111	68	39	1

であるなら，自分自身の配置場所には何らかの意味があると考えられる。そこで描画データ内の“私”の位置の特定を行うことにした。

最初に食卓を 8 領域に分割し，便宜上 1〜8 と番号を付けた（図 1 を参照）。その基準に従い，描かれた 108 枚の家族配置図の“私”の位置がどの領域の前であるのかを見極め，その番号を割り振った。なお“私”の位置の特定は，筆者と臨床心理士資格を持つセラピストの 2 人が行い，判定者間での一致率は 97.2%となり，十分妥当性のある分類となっていることを確かめた。これらを整理した結果，男女共に上部 8・1・2・3 の領域に“私”を位置づける人は少なく，下部 4・5・6・7 の領域に集中していることがわかった。なおこの分布傾向は，分析 1 の 2 において生活を共にしている人たちと家族配置図内の家族メンバーが一致していた（現状反映群）68 人と家族事情の投映を行っていた（家族事情の投映群）40 人に分けて整理しても同じ結果が得られた。以上を表 2 に示す。

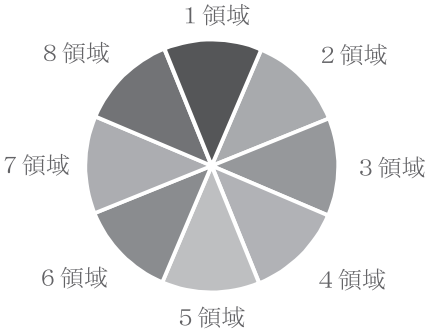


図 1. 設定した 8 領域

2.“私”の対極にいる人物の整理

研究協力者の記述には，家族メンバーの配置理由が細かく説明されていることがあった。例えば，「介護が必要な祖母の隣には母」「祖母と祖父は隣のイメージ」「私の隣は兄と弟，兄の隣は父，父の隣は母，母の隣は…と数珠つなぎで考えた」「隣の姉が一番仲良し」「自分は父の隣には座りたくない，父の話し相手になれるのは母と兄」「自分と兄は左利きなので並んで座っている」などである。一方で，「いつも座っているから」「みんな平等」「実際の位置」など，特に理由がないことに言及した記述もあった。ここから，描き手すべてに見られるものではないが家族メンバーの配置には何らかの描き手の意図が含まれることもある，と推測した。そこで分析 2 の 1 において“私”は下部の領域に位置づけられやすいとわかったように，“私”から見て食卓の一番遠い場所である中心点をはさんだ対極側に配置されやすい人物には何か傾向があるのかについて検討することにした。

最初に対極の人物の特定を，8 領域の基準に従って行った。この人物の特定も，筆者と臨床心理士資格を持つセラピストの 2 人が行い，判定者間での一致率は 94.4%となり，十分妥当性のある分類となっていることを確かめた。その結果，対極に単独で配置されやすい人物は，男女とも母親あるいは父親であるとわかった。母親の場合は男性 30.0%，女性 25.6%，計 26.9%となった。父親の場合は男性 23.3%，女性 23.1%，計 23.1%であった。またそれ以外の家族メンバー（姉・兄・祖父など）が単独，あるいは 2 人組（母と妹・父と姉・父と母も含む）で出現することがあり，それらの

表 2.“私”が配置された領域の内訳

	1領域	2領域	3領域	4領域	5領域	6領域	7領域	8領域
男性　n=30	0	0	1	6	11	7	3	2
女性　n=78	2	3	5	13	20	18	11	6
計 n=108 (%)	2 (1.9)	3 (2.8)	6 (5.6)	19 (17.6)	31 (28.7)	25 (23.2)	14 (13.0)	8 (7.4)
現状反映群 n=68	1	3	4	11	20	18	7	4
家族事情の投映群 n=40	1	0	2	8	11	7	7	4

人物についてはその他とまとめることにした。その他は男性 20.0%，女性 28.2%，計 25.9%であった。更に誰も配置されない場合もあった。配置なしは男性 26.7%，女性 23.1%，計 24.1%となった。以上より，“私”の対極に配置されやすいのは両親のどちらかであるが，それ以外の人物が位置づけられることやそもそも配置がなされないことも数多くあり，傾向について意味を見つけ出すことは本データからは難しいと判断した。対極に配置された人物の内訳（計%）を，図 2 で示す。

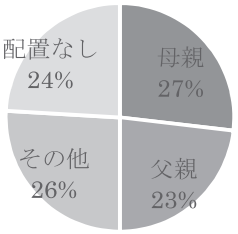


図 2. 対極に配置された人物の内訳

3. 描画データの印象評定

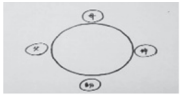
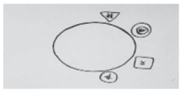
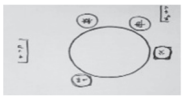
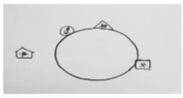
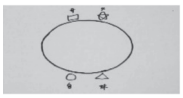
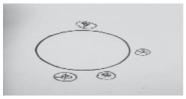
家族配置図は，場面を食卓と限定したり人物表記に簡単な記号を用いたりするため，実施にほとんど時間はかからなかった。その分，描き手の描画上の個性は出現しづらくなっていたと考えられる。今回のように多人数を同時に分析すると，よく似た描画表現が何枚も同時発生的に出現していたり，「均等な位置」「等間隔」「TV がここにあるから」といった配置理由記述が頻出していたりすることに気が付く。まれに人物に表情を付けたり，食卓に料理をのせたり，ペットを描き加えたりすることはあるが，それらもかなり簡易な表現に留まっている。ここからこの描画法は，教示によってイメージされるものの範囲が狭く，多くの人に使用されやすい配置のパターンというものがあって，それが自然と選択されていた可能性が考えられた。これは描画データから得られる情報量の減少を意味するので，心理アセスメントツールに応用するという点ではネガティヴに捉えなければならない問題である。しかしどんなものを描けばいいのか察しがつきやすく時間的負担も少ないという特徴は，描画が苦手な人や何かを表現することに対して不安が高い人にも抵抗なく取り組んでもらえることにつながるだろう。

具体的にどのような配置のパターンが使用されていたのかについて，実際の描画データで印象評定を行い分類する必要があった。そこで 108 枚の描画データを縮小して描き写し，KJ 法に準じた方法で分類を行った。その整理には筆者と臨床心理士資格を持つセラピスト 2 人が行い，判定者間での一致率は 98.1%となり，十分妥当性のある分類であることを確かめた。

その結果描画データは，一定のルールに従う 3 種類のパターン配置（89 枚）と，それらには分類することができない独自の配置（19 枚）に分かれた。3 種類のパターン配置は，均等に人物を配分する方略を取る（均等型：60 枚），横に並んでいるように人物を置く方略を取る（並び型：26 枚），部屋の間取りを示して人物を配置する方略を取る（間取り型：3 枚）の 3 タイプであった。更に独自の配置をもつ 19 枚の配置方略に，何らかの共通する印象が得られるかどうかを KJ 法によって確認した。その結果，家族メンバーの誰か一人を孤立させて配置する（孤立型：6 枚），親と子どもが対峙的に向き合うという配置をする（親対子ども型：6 枚），家族内に小さなチームを配置する（チーム型：6 枚），家族メンバーの配置にまとまりがない（拡散型：1 枚）の 4 タイプが得られた。なおこの 19 枚を描いた人たちの記述や家族状況を調べると，孤立型には両親が別居，単身赴任中，「母とはあまり話をしない」などの事情がある場合があった。親対子ども型には，「自立したい相手」，交際している男性がいる，などの事情がある人がいた。チーム型には，「女同士は距離が近い」，父とは交流を断っている，などの理由が述べられる場合があった。そして拡散型は，父・叔父・叔母という複雑な複合家族形態で暮らしていることがわかった。彼らは自身の家族状況に対する問題や葛藤を語ろうとしていた訳ではないが，この独自の配置から推測してそういう表現をせざるを得ない家族状況があり，それが

表 3. 描画データの印象評定

n＝108 枚

分類	タイプ	典型例（模写）	印象評定の基準
パターン配置	均等型 (60)		・食卓の周囲全体を利用し，均等に家族メンバーを配置する ・奇数の場合でもだいたい均等な配置になるように工夫されている ・バランスがよく家族が安定しているように見える
	並び型 (26)		・食卓の周囲を利用し家族メンバー(2 人の場合も含む)を並べるように配置する ・食卓の一部に誰も配置されていない空白が必ずある ・配置された家族を飾りに見立てると，全体がアクセサリーのように見える
(89)	間取り型 (3)		・机を四角形に変形させて配置を考える ・TV やキッチンなど部屋の間取りが生まれるものを描き加える ・TV やキッチンが描かれていても，間取りが生じていなければ分類しない
独自の配置	孤立型 (6)		・誰かを他の家族メンバーから離して配置する ・家族メンバー内にチームは作られておらず，均等型にやや近い場合も含む ・食卓から完全に離れて配置されている人がいる場合も含む
	親対子ども型 (6)		・親と子どもを対峙するように向かい合わせて配置する ・家族の関係性が緊張しているように見える ・両親と子どもたちというチーム同士での対峙の場合も含む
	チーム型 (6)		・家族メンバーの一部にそこだけ配置距離の近い人物たちがいる ・チームを作るのは 3 人の場合も含む ・チームが 2 つある場合も含む
(19)	拡散型 (1)		・配置の法則があまり感じられない ・家族メンバー間の配置距離が安定していない ・誰かが孤立して配置されているとは言えない

さりげなく描画に表れていた可能性は十分にあった。以上を，表 3 に整理して記す。

Ⅳ　総合考察

家族という言葉は誰もが知っている。しかしその言葉が意味するものは，それを使う人の個人感覚によって幾通りにも変化する。一緒に暮らしているから，血縁関係があるから，情緒的なつながりが強いから，だけが家族という感覚の根拠にはならないことを本研究の結果は示している。青年期の若者の場合，現在一人暮らしや寮・下宿生活を送っていても，自分一人だけや寮の先輩が隣に座っているような食卓を思い浮かべることはまずない。また自宅を離れていても単身赴任中の親や自立した兄弟姉妹が食卓から外されてしまうことはほとんどない。一方で両親が離婚しているならば，自分と離れて暮らす親を食卓に突如登場させることはないようだ。それが別居中であるならば，自分と離れて暮らす親をとりあえず遠くに配置しつつも，食卓に登場させたりする。家族という感覚は，現実を反映しつつもそれだけには留まらない性質をもっていることがわかる。

自明のことだが，人はどんな定位家族をもつかを自身では選べないので，与えられたものを家族として受け入れていく。そのため若い年齢の人たちがもつ家族という感覚には，受動的なイメージがつきまとう。けれど自分と仲のいい別世帯の祖母を食卓に配置したり，亡くなった母親を生きているかのように登場させたりと，家族配置図の内容には本人が主体的に表現していると考えられるものがしばしば出現する。ここから家族という感覚には，現実をそのまま受け入れる受動的側面と，与えられたものを吟味し取捨選択を行った結果できあがる主体的側面があると推測できた。そして

一度身についた感覚は，次に大幅な枠組みの解体が起こるまで，かなり安定的に継続するものと考えられる。現実にはいなくても，結婚した姉や亡くなった母親や別居中の親などが食卓に登場するのは，その人たちを除外した家族という感覚が本人の中にまだ出来上がっていないからとも捉えられるのである。

家族社会学の立場から山田（2014）が指摘するように，現代は離婚・未婚・非婚が珍しいことではなくなり，様々な点で従来の家族という枠組みが崩壊し機能しない例が増えてきている。だからこそ個人が主体的に獲得している家族という感覚に注目していくことは，これまでと違った心理学的接近につながるのではないかと考える。以下に，家族配置図法について3つの視点から考察する。

1. 侵襲性について

本研究の目的であった侵襲性の少ない家族画を考案するという点について，研究協力者の取り組み姿勢は良好で，家族配置図の方法や手続きにおいてその目的は概ね達成できたのではないかと考える。侵襲性が下がった理由としては，絵を描くことにこだわらなかった点が大きいと感じる。どんな記号を使っても良いという教示はかえって研究協力者の意識を楽にしたようで，簡易ながらもさまざまな表現が自由に選択され，家族配置図の可能性を広げていた。これは臨床現場で家族表出困難児たちに家族配置図が使用される際の強みになると考える。

だが侵襲性がまったくなくなったとも言えない結果が出た。それは一部の人に不評だった丸い食卓の形で，せっかくいつもの家族の席配置を描こうとしているのに丸では何かおかしい，という文句となって表れてきた。ここから円卓にしたことの効果で，研究協力者が心理的抵抗から無難な家族表現を行おうとするのをさりげなく退けることに成功したのではないかと考えた。侵襲性は高すぎても問題だが，まったくなくなるとその課題はアセスメントとして役立たないものでもあるのだろう。そう捉えると，家族配置図内に無理矢理間取りを生み出す人（分析2の3）などは，それだけ警戒心が強いといった指標にできそうである。この問題は，今後臨床現場での応用を進める上での重要な示唆が含まれている。

そして侵襲という点では，家族配置図そのものより，分析を補てんする情報を得るために行ったワーク1の方が，むしろ侵襲的であったのではないかと感じる。家族配置図Rejectの3人は，ワーク1まで行ったところで作業をやめていた。ワーク1を先に実施してしまったことで，ワーク2の家族配置図にも何らかの影響が出た可能性は否定できない。反省点の多いワーク1だが，この情報群のおかげで投映された家族事情（分析1の2）などユニークな分析を行うことができたと言える。今一度内容を見直し，家族配置図法の中に取り込んでいくことができないかどうか，検討する必要がある。

2. 家族画としての有効性

家族配置図が家族画法として成立するかどうかは，ここから読み取れるものが何であるかを明らかにし，ある程度安定した解釈枠組みを提示できることが肝要である。

描画テストの解釈過程について，高橋（2012）は，1. 全体的評価・2. 形式分析・3. 内容分析という3つの視点を示している。これを家族配置図に照らすと，1. 全体的評価は，印象評定（分析2の3）として捉えられる。家族配置図は，課題から浮かぶイメージの範囲が限られているために，均等型や並び型，間取り型といったパターン配置を使用する人が必然的に多くなっていた。特に今回は青年期の健常群の資料によるものであったことからその傾向が強く出ていただろう。パターン配置を使うことも大事な解釈の一つになるので，家族表出困難児の資料でこれらがどの程度出現するのか，その意味も含めて見極めていくことが必要と考える。2. 形式分析については，家族の中で自分を置いて安定する下部領域の位置（分析2の1）を明らかにした。これはバウムテスト（Koch，1952／1970）の分析でよく用いられるGrünwaldの空間図式の解釈にもつながる結果だと推測できる。また今回はそのような事例がほと

んどなかったので行っていないが，臨床データでは，家族として描いた記号が大きかったり小さかったり濃かったり薄かったりという形式のバリエーションがある可能性が高い。家族配置図ならではの形式分析を検討することが求められる。3. 内容分析には，投映された家族事情（分析 1 の 2）や，印象評定（分析 2 の 3）の独自の配置などが指標となるだろう。家族配置図はこれらの情報によって，描き手自身が感じている，自分を迎え入れてくれる自分が迎え入れたい家族メンバーが誰であるかを素朴に伝える機能を持つ。家族内葛藤も少しは読めるが，それよりは家族という感覚の安定性を見るものとして考えると，安定していない時，配置図も恐らく不安定になるだろう。また安定すると，それなりの場所に落ち着いた配置がなされるのではないだろうか。このような特徴を活かした解釈を示すためには，様々な事例を検討し具体例を積み上げていくことが重要である。

現時点での家族配置図法は，安定した解釈枠組みを導き出すにはまだまだ未完成な部分が多い。だが家族画としての有効性を示す萌芽は本研究結果から得られたと考える。

3. 今後の展望

描画テストとしての体裁を整えるために，一定の基準に則った実施手続きを早急に設けなければならない。今回は多くのデータを同じ条件で集めるために，ワークシートを使ってあらかじめ円卓を用意した。そのため研究協力者は，恐らく自分でもあまりそうと意識せず家族配置を行った可能性がある。その結果，投映された家族事情の分析へとつながった。これは意味のあることだが，一方で子ども相手の臨床場面で取る方法としてはかなり無機質な印象を与えることを危惧する。せめて食卓ぐらいはセラピストが目の前で描いた方が，子どもも安心し，一緒に描画を味わうこともできそうだ。だがセラピストがフリーハンドで正確な正円に近いものを描くことは不可能である。この難問を解決し妥当な実施手続きを決定することが，喫緊の課題である。

その上で家族配置図法の更なる発展のために，本研究では男女比に偏りがあり不十分であった性別による違いや他の家族画法との比較などについて，今後検討していきたい。

＜付記＞

この家族配置図は，筆者が大阪樟蔭女子大学大学院時代に大江米次郎先生が下さったアイディアをもとに，工夫を加えつつ時間をかけて発展させたものである。きっかけを下さった大江先生に心より感謝申し上げます。

文献

遠藤辰雄（監修）（1989）. 家族画ガイドブック. 矯正協会.

亀口憲治（2009）. 家族イメージ法（FIT）を用いた家族理解の工夫. 臨床描画研究，**24**，20−38.

川喜田二郎・牧島信一（編）（1970）. 問題解決学 KJ 法ワークブック. 講談社.

Koch, C.（1952）. *The Tree Test*（*Der Baumtest*）. Bern：Hans Huber. 林　勝造・国吉政一・一谷　彊（訳）（1970）. バウム・テスト－樹木画による人格診断法. 日本文化科学社.

近藤孝司（2009）. 描画法による対象関係のアセスメント－S−HTPP における，描かれた人物像の相互作用の検討. 臨床描画研究，**24**，146−162.

水島恵一・草田寿子（2006）. 図式的投影法（家族関係を中心に）氏原　寛・岡堂哲雄・亀口憲治・西村洲衞男・馬場禮子・松島恭子（編）心理査定実践ハンドブック. 太洋社，pp 788−796.

奥野哲也・内田裕之・石橋正浩・串崎真志（2004）. ソンディ・テスト入門. ナカニシヤ出版.

塩飽　仁（2015）. 被災地の子供の描画と遊びのケア. 臨床描画研究，**30**，21−32.

高橋雅春（1974）. 描画テスト入門−HTP テスト−. 文教書院.

高橋依子（1989）. 描画テストの実施法. 遠藤辰雄（監修）家族画ガイドブック. 矯正協会，

pp 32-39.
高橋依子（2012）．臨床に活かす描画－心理テストから心理療法へ．臨床描画研究，**27**，64-83.
上野千鶴子（1994）．近代家族の成立と終焉．岩波書店.
宇治和子（2013）．ドメスティック・バイオレンス被害母子が抱える親子間の課題－避難シェルターで求められる心理的支援について－．大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科　臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要，**6**，21-31.
山田昌弘（2014）.「家族」難民－生涯未婚率 25%社会の衝撃－．朝日新聞出版.

＜資料 1＞

ワーク 1

＊上野千鶴子　ファミリー・アイデンティティ調査を参考

1．あなたは今何歳で、どのような生活をしていますか？

（　　歳：　　例：1 人暮らしなど）

2．あなた自身のジェノグラムを書いてみましょう

注）○は女性　・　□は男性　・　自分は二重にする
自分を中心にして左が父方、右が母方で統一
亡くなっている人は×印
夫婦関係が切れたところは二重線

3．あなたが「自分の家族」と思う範囲に線を引いて囲みましょう

＊ジェノグラムに描き込むこと

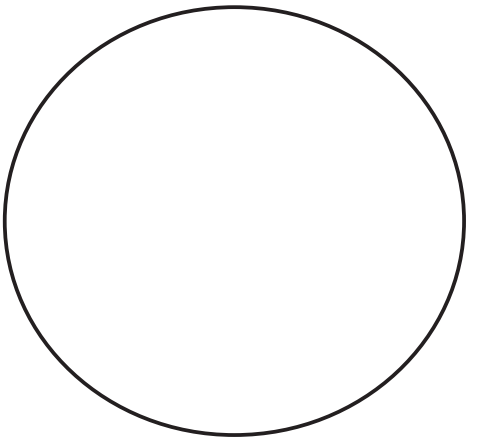
4．あなたが引いた「自分の家族」の範囲には、どんなルールがありましたか？

（　　）

ワーク 2

＊家族配置図（uji）

１．丸い形は食卓です。家族が座っているところを想像して下さい。



２．家族はどんな風に座っていますか？○や△、□などで分かるように印をつけて下さい

＊食卓に描き込むこと

３．誰がどこに座っているかを、「自分」、「妹」、というように文字で書き加えて下さい

＊食卓に書き込むこと

４．あなたが食卓に配置した家族は？自己分析してみましょう・・・

（　　）

＊このデータを研究目的で（匿名で）数量的にまとめようと思っています。ご協力をよろしくお願いします。